POLE

第１０４号
北海道ポーランド文化協会会誌「ポーレ」
２０２１.９.１

総会

第３５回 定例総会１３:３０～

※本会会員向け（同封の返信用はがきで出欠をお知らせください）

交流会

《第９９回例会》第１０回「午後のポエジア」

動画鑑賞会１５:００～

10/31(日)
札幌エルプラザ
4F 中研修室

※どなたでもご参加いただけます。
事前に収録した動画を鑑賞。ダンスパフォーマンス「Orawa」や紙芝居なども検討中
※入場無料・定員先着30人（座席数の半数）・予約必須（氏名・連絡先をお知らせください）
参加申込み先： hokkaidopolandca@gmail.com（協会）080-4071-0956（安藤）

２０１１年以来恒例の《午後のポエジア》は今年で 10 回目を数えます。昨年はパンデミックのため開催を断念しましたが、今年は会員の皆様の熱意に応えて、個別に取材された朗読の動画を一まとまりの映像作品に編集し、動画鑑賞会と YouTube を通して発信するオンライン開催を企画します。

本会会員の皆様やご縁のある方々に参加を呼びかけ、「ポエジア」の伝統に立ち返りつつ、ポーランドゆかりの詩や音楽からコロナ下での生き方を探り、発信しましょう。

昨年から交流ができた「シロンスク」民族合唱舞踊団やマンガ博物館の協力も得て、「ポーランド魂」の要素と「ポエジアの伝統」を絡めたプログラムなども含め、コロナ禍にもかかわらず、大きなエネルギーを持つ例会にしたいと思います。

「午後のポエジア」動画制作の呼びかけ

----------概要----------

今私は、ポーランドの大好きなあの詩を朗読したい！
あの方のあの詩の朗読をもう一度聞きたい！

スケジュール：
1）9月中旬～： 朗読などの映像を参加者個別に取材・撮影
2）10月上旬～： ビデオ作品として編集
3）10/31（日）交流会（動画鑑賞会）で公開後 YouTube で発信
取材会場： 札幌エルプラザなど

----------出演者募集要項----------

内容： 広い意味で日本とポーランドの文化交流に役立つパフォーマンス（文学作品の朗読、演奏など）
出演者： 1）本会会員、2）本会にゆかりのある方
※ビデオ作品のホームページ公開にご同意いただける方
出演申込み・問合せ先： hokkaidopolandca@gmail.com（協会）
080-4045-1461（熊谷）FAX 011-556-8834（安藤）
出演申込み期限： 9月30日（木）

過去の懇親会・午後のポエジア風景

［構想］「シロンスク」舞踊団よりダンスパフォーマンス「Orawa」動画=左上写真=、日本美術技術博物館マンガより紙芝居『遠い遠い東の国で有名になったブロニシ・ピウスツキ』=左写真=（日本語訳：田村和子さん）をご提供いただき、これらの素材も活かして、ゆるやかなつながりをもった全体で90分程度の作品を作りたいと考えています。（担当：松山、熊谷ほか）

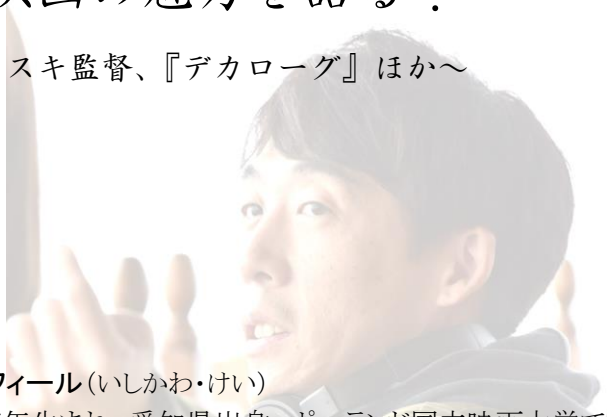
COVID-19 対策

互いの距離をとり換気を十分行います。マスク着用をお願いします。飲食の提供はありません。
感染拡大のため開催延期/中止になる可能性があります（予備日11/7（日））。

《第９７回例会》講演と交流の集い

石川慶監督 ポーランド映画の魅力を語る！

～ポーランド国立映画大学、キェシロフスキ監督、『デカローグ』ほか～



石川監督からのメッセージ

札幌は、以前にも短編映画祭に何度も出品していた過去がありとても思い出深い地です。『デカローグ』は自分にとっても映画作りの教科書のように長年見続けてきた作品ですので、思い出深い地で、思い出深い作品のお話ができることを楽しみにしています。

2021 9/17（金）18：30～

札幌エルプラザ４階中研修室Ｃ

入場無料・予約必須・定員先着２０人

問合せ・申込み先

090-1306-7462（園部）

hokkaidopolandca@gmail.com

プロフィール（いしかわ・けい）

1977年生まれ、愛知県出身。ポーランド国立映画大学で演出を学ぶ。2017年に公開した『愚行録』では、ベネチア国際映画祭オリゾンティ・コンペティション部門に選出されたほか、新藤兼人賞銀賞、ヨコハマ映画祭、日本映画プロフェッショナル大賞では新人監督賞も受賞。恩田陸の傑作ベストセラーを実写映画化した音楽青春ドラマ『蜜蜂と遠雷』(19)では、毎日映画コンクール日本映画大賞、日本アカデミー賞優秀作品賞などを受賞。2021年にはケン・リュウ原作の SF 映画『Arc アーク』が公開された。

［COVID-19 対策］互いの距離をとり換気を行います。マスク着用をお願いします。飲食の提供はありません。
感染拡大のためイベントが延期・中止になる可能性があります。

共催　ポーランド広報文化センター　シアターキノ

映画による十戒 ～キェシロフスキ監督『デカローグ』～

久山 宏一

キェシロフスキ生誕 80 年・没後 25 年

今年(2021年)は3人の偉大なポーランド人映画作家の記念年です。年長順に列挙すると、『パサジェルカ』のアンジェイ・ムンク(1921~61)の生誕100周年・没後60周年、『灰とダイヤモンド』のアンジェイ・ワイダ(1926~2016)の生誕95周年・没後5周年、そして『トリコロール』のクシシュトフ・キェシロフスキ(1941~96)の生誕80周年・没後25周年です。1940年代末～50年代前半に映画監督として独り立ちしたムンクとワイダは、その10年後に「映画におけるポーランド派」を代表する監督として世界的名声を獲得します。キェシロフスキは同派が退潮期に入る1960年代半ばに映画作りを始めました。

創作の三つの時期

30年に及ぶ彼の創作は約10年ごとに3つの時期に分かれます。①記録映画時代②弁護士クシシュトフ・ピェシェヴィチ(1945~)と出会うまで、そして③シナリオをピェシェヴィチと共同執筆した時代です。第3期の前半(1984~88)はポーランドで、後半(91~94)はポーランドの体制転換と軌を一にするように、国境を越えた「世界映画」を撮りました。

キェシロフスキの25回目の命日にあたる本年3月13日、ピェシェヴィチはキェシロフスキとの共同作業を回顧した『「終わりなし」から終わりまで』(映画評論家ミコワイ・ヤズドンよる聞き書き)を刊行しました。表題の『終わりなし』(84)とこの度日本で劇場再公開される『デカローグ』(88)は第3期の前半、『二人のベロニカ』(91)『トリコロール』(93~94)は後半に作られました。

『デカローグ』はそのタイトルが示すように、1時間弱の TV 映画10本の連作、そこから2本の長編劇映画『殺人に関する短いフィルム』(87)と『愛に関する短いフィルム』(88)が派生しました。『トリコロール』もタイトル通り、3本の長編『青の愛』『白の愛』『赤の愛』から構成されています。連作性はキェシロフスキ+ピェシェヴィチの創作の一つの特徴です。

『デカローグ』

以下、『デカローグ』に焦点を当ててみましょう。

２人のクシシュトフが依拠したモーセの十戒のうち、第1～4戒は神に対する規定(「他神崇拝・偶像禁止」「神名濫唱禁止」「安息日遵守」「父母尊重」)、第5～10戒は隣人に対する規定(「殺人禁止」「姦淫禁止」「窃盗禁止」「偽証禁止」「隣人の妻侵害禁止」「隣人の財産侵害禁止」)です。両群で、最初の2戒は神・隣人についての本質論、残りは補論(神への態度、隣人の所有する事物との関係)とされています。

十戒に倣った映画を作るアイデアは、ピェシェヴィチからキェシロフスキへの提案だったそうです。それを示すかのように、『デカローグ』のシナリオ作者名は「Piesiewicz / Kieślowski」の順にクレジットされています。

２人は映画で「混沌と無秩序」(キェシロフスキ)に抗する「統一と秩序」を打ち立てようとして、それを社会主義ポーランドの政治・貧困・伝統への言及抜きで遂行しました。困難な試みは大成功を収め、作品誕生から30数年を経た今でもほとんど古びることなく世界中で鑑賞されています。

鑑賞の順序は自由に

『デカローグ』の各篇が十戒に倣って並べられているなら、別の順序で並べれば…といった仮定は的外れです。これは、編集段階でさまざまな配列を試すことができるオムニバス映画ではありません。しかし、必ずしも1～10の順で観なくてはならないわけではなく、バラバラの順で全話を観て、それから脳裏に連作の全体像を作り上げても、単独の挿話を抜き出してそれだけ観てもかまいません。いずれにせよ、どの「禁止」に関わる挿話か？だけは、鑑賞の前後に確認しておくことをお勧めします。

最後に個人的な感慨を記します。私は『デカローグ』全篇を初公開直後に番号順に観ました。その後、時々の気分でさまざまな挿話を抜き出して観なおしています。珠玉の短編映画ぞろいですが、初見時には5・6・8に強く惹かれたように記憶します。その後、年齢を重ねるにしたがって2・3・9・10が他人事ではなくなってきました。仮に私に子どもがいたなら1がより切実に迫ってくるでしょうし、女性には4・7が痛いほどわかることでしょう。『デカローグ』は観る人の性別・年齢・境遇によって姿を変えていく、万華鏡のような作品なのです。

どの挿話からでもけっこうですから、ご覧になってください。お気に入りの物語があれば、一つまた一つと別の物語が観たくなるでしょう。まずは『デカローグ』という深遠なる森に、第一歩を踏み入れてみてください。必ずや、あなたにとって、末永く付き合いつづける親友のような映画になることでしょう。

『デカローグ』

1. ある運命に関する物語　56分
2. ある選択に関する物語　59分
3. あるクリスマス・イヴに関する物語　58分
4. ある父と娘に関する物語　58分
5. ある殺人に関する物語　60分
6. ある愛に関する物語　61分
7. ある告白に関する物語　57分
8. ある過去に関する物語　57分
9. ある孤独に関する物語　61分
10. ある希望に関する物語　60分

(くやま・こういち、ポーランド広報文化センター・エキスパート、専攻:ポーランドの文学、映画と演劇)

=写真=©Maciej Komorowski

クシシュトフ・キェシロフスキ監督 生誕 80 年／没後 25 年記念イヤー

ポーランド映画の金字塔 『デカローグ Dekalog』

1988 年｜ポーランド作品｜カラー｜HD リマスター版

「デカローグ」は「十戒」を意味し、旧約聖書を踏まえ、現代に生きる人々の日常生活の地平に存在する孤独と愛の苦悩を鮮やかに描き出す心揺さぶる珠玉の十篇

〈誰の人生でも探求する価値があり、秘密と夢があると私は信じているんだ〉

キェシロフスキ監督

シアターキノ、９月１８日（土）～３０日（木）全十篇上映、9/18 夕方「ある運命に関する物語」上映&石川慶監督講演「キェシロフスキ映画の主題と魅力」

ポーランド国立民族合唱舞踊団「シロンスク」の動画から

～「EXODUS」、民族舞踊ワークショップ、弦楽四重奏～

小川 真生、中宮 典子、田口 綾子

「シロンスク」合唱舞踊団から「EXODUS」とフォークダンス振付けレッスン（ワークショップ）のDVD、そして弦楽四重奏オンラインコンサートの配信を受け取り、繰り返し視聴する機会に恵まれました。

弦楽四重奏

弦楽四重奏コンサート*は、ヴォイチェフ・キラルの「ある貴婦人の肖像」から始まり、映画音楽が暖かく柔らかな音色で流れて行きます。中ほどで、エンニオ・モリコーネのサウンドトラック「ニューシネマパラダイス」の中で子息アンドレア作曲の「愛のテーマ」が流れて来ました。

この曲を初めて聴いたのは、リトアニア出身のアコーディオン奏者、マルティナス・レヴィキスのアルバムによってでした。当時親族をあいついで亡くし、枯れ果てていた心に「愛のテーマ」のメロディーが沁み込んできて、泣けました。その後「ニューシネマパラダイス」を探して映画を観たのです。

弦楽四重奏の「愛のテーマ」を聴き、主人公のト（サルバトーレ）とエレナのツーショットが甦りました。

映画音楽の巨匠の方々の曲はみな素敵で、ヴァイオリン、ヴィオラ、コントラバスの演奏も美しく、素晴らしい音色にひたることができました。「愛のテーマ」もさらに忘れられない曲となりました。

「EXODUS」

「EXODUS」*は斬新で幻想的でした。

落雷の音、流れ落ちる砂、風の音、嵐、水の音、鼓動、それらと一体化したヴォイチェフ・キラルの音楽が流れ、そしてダンサーの美しい表情や動きに圧倒され、モノクロのダンスパフォーマンスは心の奥深くにストレートに入り込んで来ました。

強い意志、他者へのいたわり、大集団の中の自律、孤独な旅、まるで人生のようです。ハレルヤと讃えられたこの旅に、美しく強い生命力を感じました。言葉では表現しきれませんが、何物にも屈しない、力強い生命力！その波動に共鳴しました。

振付けレッスン

振付けレッスン動画*は豪華な内容で、ワークショップも例会もできない昨今ですが、ワークショップに参加できる日がとてもとても待ち遠しくなりました。

ともすれば塞ぎ込んでしまいそうな自粛の時期、DVDと動画配信に感謝いたします。

（おがわ・まき、札幌フォークダンスクラブ、本会会員）

ワークショップ(WS)動画

「シロンスク」舞踊団から DVD が届いた。34ページの写真入り説明書付き。昨年11月に開催された動画鑑賞会「EXODUS」と民族舞踊 WS の全てが収録されている。

重厚な黒の装丁の表紙を開けると目に飛び込んできたのは、総勢69人が楽しげにポーズを取ったカラフルで完璧過ぎる写真である。後方はおそらく合唱団で16人の男性が羽に長いリボンのついたもの、20人の女性がカラフルなハンカチを男女揃って高く持ち上げ、手前には男女各16人のダンサーが緩いVの字に配置し、シンメトリーになるように片手を上げている。手の向きは列によって様々だが、指の先まで表情がある。

白いレースのエプロン、クリスマスカラーの赤とグリーンをうまく使った衣装を黒のベストが引き締める。そしてそれには緻密な刺繍が。男性ダンサーだって負けてはいない。赤と白の細い縦縞のズボンが心憎いし、長めのチョッキ

4

* https://www.facebook.com/InstytutPolskiTokio/posts/3838903769512154
* https://www.youtube.com/playlist?list=PLBS8QnZswkMlZNdcHius56zBmqpyJcQQV

にはびっしりと刺繍が。この静止画だけで釘付けなのに、動き出したらどこに視線を置けばいいのだろう。

次ページ、中央の男性が両脇に抱えた女性にkissの動作。日本人にはできるだろうか…。女性の頭にはこぼれ落ちそうなほどのリボンと玉の髪飾り。4連の朱色大粒ネックレス。わぁ、すてきー。一枚毎に立ち止まる。

WS の DVD は35分くらいで、伝統に深く根付いたポーランドのナショナルダンスのうちポロネーズとクラコヴィアック、そしてシロンスク地方特有の踊りであるトロヤック（女性2人男性1人の3人1組で踊る）各々の踊り方のレッスン動画である。基本のステップやホールドの仕方、色々な手の位置とその動き、数種類もある基本の動作、挨拶の仕方などの説明と、最後にそれらを組み合わせたもので1曲踊る構成だった。

習ったつもりでも細かな部分など曖昧で、何度も見て目に焼き付けることができるのが記録媒体の利点である。手先や足先の動き、背筋を伸ばし気品を保った姿勢で常に相手に向けている眼差しと微笑みなど、言葉だけではわからないものが映像では伝えられて大変参考になった。

実際の公演ではここまで細かなことは見えないし、瞬時のことは忘れてしまう。DVD を手元で繰り返し見られるのは実に貴重である。男女二人の間には暖かいものが流れ、見る側の心も和ませてくれた。

製作し贈って下さった方々に感謝いたします。

（なかみや・のりこ、フォークダンスグループ「たんぽぽ」）

「シロンスク」からの贈りもの

今年4月「シロンスク」舞踊団から本協会に贈られたDVDを、希望者に先着順でいただけるチャンスがあり、私は「ポーランド民族舞踊ワークショップ（振り付けレッスン）録画」は、ピアノを習っている生徒さんなどにも活用できるかもしれないと思い、その贈呈を希望しました。昨年11月21日の『エクソドゥス』動画鑑賞会には参加できなかったのですが、同じ内容の動画を扱いやすいDVD でみることができてありがたいです。またきれいな写真や解説のついた立派な贈りものでたいへん感謝しております。

「エクソドゥス」

その中で、先ず「エクソドゥス」を、解説をみない状態で観たのですが、とても印象的でした。ダンサーの動きやシーンがコマ送りのような感じで変化していく様に、これは何を意味しているのだろう？と想像をかき立てられました。そこからはいろいろな感情のようなものが伝わり、身近なところでは、子供のころ体育の授業であった創作ダンスを連想したりもしました。DVDをお貸ししたピアノ学習者も同じように感じたようです。

そして音楽に関しては、ダンサーの動きと音楽がひとつのものとして感じられました。解説によると、ポーランド人ピアニスト兼作曲者ヴォイチェフ・キラルの音楽によっているそうです。

また DVD の解説や同時に送付された会誌「ポーレ」103号を拝読し、100年以上前にポーランド孤児が救出され敦賀港と大阪港から上陸して手厚い看護を受けたという出来事などから、このたび最初の動画鑑賞会が「人道の港敦賀ムゼウム」で行われたことを知り、心に迫るものを感じます。

振付けレッスン動画

ピアノ学習者にとって、ポロネーズやマズルカなどポーランドの音楽には、民族舞踊を学ぶことが必要です。「ポーランド民族舞踊ワークショップ（振り付けレッスン）録画」は日本語音声の解説でとてもわかりやすく感じました。

2枚の DVD がセットになっていて、DVD をお貸ししたピアノ学習者も2枚ともみたそうで、言葉に尽くせない何かを深く感じ取ったようです。

またこの感想文を書く機会に過去のポーレを読み返してみました。きちんと読んでいなかったのか、知らなかったことも発見して、思いがけず学びの機会を得た心地です。どうもありがとうございました。

（たぐち・あやこ、ピアニスト、札幌大谷大学短期大学部非常勤講師、本会会員）

コンピュータを利用した私のアイヌ語研究

ミハウ・プタシンスキ

ピウスツキのアイヌ語研究

2019年には日本ポーランド国交樹立100周年を迎えた。この出来事の背景にはいくつもの変数が働いているが、不可欠な歯車の一つは、ブロニスワフ・ピウスツキ氏の日本における活躍であった。ただし、サハリン・北海道に滞在する間にピウスツキは決して政治や外交を中心に活動をしたわけではない。北海道の先住民であるアイヌのユニークな文化と言語を研究し、その魅力を理解し、絶対にこの文化と言語を世界に普及させ保存したいという気持ちでアイヌの親しい友となったのだ。

ピウスツキの他にもアイヌ語を研究した偉大な研究者がいた。英国聖公会宣教師ジョン・バチェラー、日本の言語学者金田一京助、それぞれのアイヌ文化・言語研究と維持への貢献は否定できない。

しかし、ピウスツキの研究活動には目立ったところがある。彼はその時代の最新技術である蝋管を用いてアイヌ語を初めて音声メディアに録音し、次世代のために保存してくれたのだ。100年後に生のアイヌ語がどれだけ珍しい、希少なものになるか、当時ピウスツキが知っていたはずはないが、研究者としての勘に導かれて、その研究に必死で飛び込んだのである。

ピウスツキのあとを継いで

私がアイヌ語、ピウスツキの活躍について知ったのは2001年頃、大学に入学したときである。日本という遥か遠い国で、人類における言語誕生の秘密の鍵を握るとも言われる孤立言語(langauge isolate)であるアイヌ語を初めて最新技術を用いて研究したのはポーランド人だったとは—その意識を心に抱え、誇りと自己卑下の混ざった気持ちで大学時代を送った。その後、言語学を修め、人工知能・自然言語処理技術で学位を取得することとなり、さぁようやく世界の役に立てたいと思った時、当時私が特別研究員として在籍していた北海学園大学の桃内佳雄教授がアイヌ語の研究をされているのを見てピウスツキを思い出した。

やらなきゃ—最初は少しずつ踏み込み、あっという間にはまっていた。アイヌ語の維持に、ピウスツキほどは貢献ができないかもしれないが、彼と同じように現代の最新技術である人工知能と自然言語処理の手法を用いてアイヌ語の保存・維持・復興に貢献し、そしてアイヌ語について研究を続けている研究者の役に立ちたいと思った。

表１文法情報付与（形態素解析）機能の
コンピュータプログラムの出力の例

Sentence:
Ci nukar wa ci eramesinne pet esoro hosippa as .
Translation:
When I saw this I was relieved and came back with the river current.

Vertical output

ci	人称接辞, 意味:私（たち）[I/we]
nukar	他動詞, 意味:見る [see]
wa	接続助詞, 意味:て [conj.]
ci	人称接辞, 意味:私（たち）[I/we]
eramesinne	他動詞, 意味:安心する [be relieved]
pet	名詞, 意味:川 [river]
esoro	他動詞, 意味:沿うて下る [swim down with the current]
hosippa	自動詞, 意味:戻る [come back]
as	人称接辞, 意味:私（たち）[I/we]

Horizontal output
ci nukar wa ci eramesinne pet esoro hosippa as .
人称接辞 他動詞 接続助詞 人称接辞 他動詞 名詞 他動詞 自動詞 人称接辞 ピリオド
私（たち）見る て 私（たち）安心する 川 沿うて下る 戻る 私（たち）.

研究開発の進展

そのためには、まずアイヌ語の文法（名詞、動詞などの形態素）を自動的にコンピュータで解析できるプログラムを作成した。その後、後輩で友人のカロル・ノヴァコフスキさんとアイヌ語の大規模な言語資源（音声・テキストのコレクション）を収集し、これに文法情報を付与した（表1）。

現在は、そのデータをさらに活用して、手書きの形で残されているアイヌ語の文書から自動的な文字認識、そして音声形式で残されているアイヌ語

図１.ペッパーロボットとアイヌ語で話す筆者

* https://youtu.be/GlyIUnnng5A

* https://www.youtube.com/watch?v=RTuGqgDNBC8

の歌の朗読や会話を自動文字起こしに応用する予定である。その技術のショーケースとして、SoftBank のペッパーロボットにアイヌ語を話す機能を載せ(図1)*、さらなる発展を考えている。

ピウスツキのアイヌ語の維持への貢献を記念し、彼が残した遺産を称揚するための一番の方法は、彼の銅像を立てることではなく、彼と同様の方針で彼の研究を続けること、つまり、ピウスツキと同じように、今の時代の最新技術を用いてアイヌ語を研究し、アイヌ語・アイヌ文化の維持と復興をより容易にすることこそが今の私の責務だと信じている。

(Michal Ptaszynski、北見工業大学准教授)

今秋のアマレヤ劇団北海道公演の計画

丸山 博

紋別、白老(ウポポイ)でも公演

今秋もアマレヤ劇団 Amareya Theatre & Guests は、ポーランド文化・国家遺産省の競争的資金を獲得し、アイヌ女性や東京の舞踏家との共演のため来日する予定です。

北海道には11月1～30日まで一カ月間滞在し、紋別、白老、札幌の三カ所で、新作「アイヌとカムイのためのレクイエム」の公演を行うほか、ベアタ・ソスノフスカ Beata Sosnowska の歴史漫画「ムーヴィ・オーエヌエヌア Mówi ONNA」のワークショップ、カタジナ・パストゥシャク Katarzyna Pastuszak、ナタリア・ヒリンスカ Natalia Chylińska、アレクサンドラ・シリヴィンスカ Aleksandra Śliwińska らによるストーリーテリングのワークショップや、ポーランドのフィジカル・シアター・アーティストの方法論に関する演劇ワークショップなども予定しています。

2017年以来4回目の来道で、毎回新作の公演に挑戦するところにアマレヤ劇団の知性と志の高さを感じます。

図 1. ムックリ（口琴）を奏でるナタリア・ヒリンスカ, 2021. 7.28, 撮影:カロリーナ・ユージュウィアク Karolina Jużwiak

それはまた、プログラムを講演だけに限定せず、毎回異なる研究者や他のジャンルのアーティストとのワークショップを開催することなどからも窺えます。一昨年はマンガ博物館副館長のカタジナ・ノヴァク Katarzyna Nowak とワルシャワ大学ポーランド文化研究所のアガタ・ハウプニク Agata Chałupnik 博士を東京に同行しました。

昨年はコロナ禍で日本政府の入国許可が得られず、残念ながらオンラインでのウェビナーや公演となりましたが、ウェビナーには元ポーランド駐日大使ヤドヴィガ・ロドヴィッチ=チェホフスカ Jadwiga Rodowicz-Czechowska 博士らを招きました。

マルチメディア・アーティスト ベアタ

今年アマレヤとともに来道するベアタ・ソスノフスカは、詩、ヴィジュアルアート、映像制作などさまざまなジャンルで活躍するマルチメディア・アーティストです。ベアタは、2018年のポーランド女性の投票権獲得100周年を記念する展覧会でポーランドの女性活動家の肖像画を作成し、それらの中にはユゼフ・ピウスツキ Józef Piłsudski の妻アレクサンドラ Aleksandra Piłsudska の肖像画もありました。今回はアイヌの権利回復のために闘う長老に敬意を表し、その肖像画に挑戦すると聞いています。

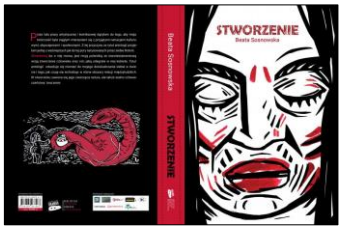


図 2.『クリエーション Stworzenie』ベアタ・ソスノフスカ著, 2020

今年も日本政府の入国許可が得られるかは不明で、現在の対応を見る限り楽観的にはなれませんので、万一のためにプラン B も用意しています。

幸いにして、もし来道できれば、彼女たちはみなさまとの交流も楽しみにしています。今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

（まるやま・ひろし、環境とマイノリティ政策研究センター Centre for Environmental and Minority Policy Studies: CEMiPoS 所長）

新刊紹介

『ショパン全書簡』第２巻、第３巻

S・ヘルマン;Z・スコヴロンほか(編)、関口時正ほか(訳)

岩波書店
2019.10,
2020.12

全書簡第３巻の刊行を祝う

ショパンが書いた手紙や、ショパンが家族や友人、知人から受け取った手紙をすべて集めた『ショパン全書簡』の第3巻（原書第2巻［日本語訳では2分冊］の後半）が2020年12月に岩波書店から刊行されました。原書第2巻（ポーランド語以外の原語も含む）は2017年に刊行されましたので、約3年の時差を経て、日本語訳が姿を現したことになります。第3巻までの内容は次のとおりです。

【日本語訳】書簡の時期／収録数／
　原書刊行年／日本語訳刊行年
第1巻　1816～1831年　ポーランド時代／90通／
　2009年／2012年
第2巻　1831～1836年　パリ時代(上)／138通／
　2017年／2019年
第3巻　1836～1839年　パリ時代(下)／255通／
　2017年／2020年

どの巻も、索引を含めて約700頁の大部ですが、手紙だけでなく、写真、演奏会プログラム、地図なども含まれています。まさに、私たちが現在手にしうるショパンの主要な資料をすべてまとめたオムニバスであり、書簡集というよりも「ショパン事典」か「ショパン総覧」とも呼ぶべき大作になっています。しかしなお、この一大プロジェクトは完結したわけではなく、今後、日本語訳第4巻となる1839～49年の書簡集の原書第3巻が2022年か23年に刊行される計画で、さらに数年後に残りの巻の刊行が予定されているそうです。しかも、原書第3巻は日本語訳では3分冊になりそうで、想像もできないほど浩瀚な、全集のようなシリーズになるようです。

原書の編者は3名で、第1巻刊行時のプロフィールでは、ゾフィア・ヘルマン先生（ワルシャワ大学史学部音楽学科教授）、ズビグニェフ・スコヴロン先生（同）、ハンナ・ヴルブレフスカ=ストラウス先生（元フリデリク・ショパン博物館館長）です。

日本語版の訳者は、関口時正先生（東京外国語大学名誉教授）を中心に、ポーランド語通訳や翻訳、ポーランド音楽研究の分野で活躍する方々です。

ショパン生誕 200 周年記念に

ポーランドで『全書簡』の刊行が企画された大きな動機は2010年がショパン生誕200周年に当たることですが、日本の事情からは、東欧革命を経た1991年に東京外国語大学に「ポーランド語専攻」が設置され、ポーランド語を専門に学べる体制が確立されたことの一つの大きな成果が、この訳業に現れているように思われます。

とくに原書編者のお一人のスコヴロン先生には、日本語訳第1巻刊行後の2013年10月に札幌で講演していただきましたので、この度の日本語訳第3巻の刊行には特別な感慨を覚えます。札幌でお会いしたとき先生に刊行計画を伺ったところ、15年のショパン国際コンクールに合わせて原書第2巻、その次の20年のコンクールに合わせて第3巻を刊行予定と話されていたことを記憶していますが、日本語訳第3巻の刊行が奇しくも2020年になりました。あらためて、この一大プロジェクトに取り組まれている関係各位に敬意を表したいと思います。

折しも、この原稿を執筆している2021年7月現在、ワルシャワでショパン国際コンクールの予選が開催され、日本からの出場者14人が予選を通過しました。20年に予定されていたコンクールがコロナ禍により延期され、本選は今年10月に行われます。

全書簡の翻訳出版は日本のみ

「訳者後記」によれば、この全書簡がポーランドの外で翻訳されたのは今のところ日本だけ、つまりショパンの手紙を完全に読めるのはポーランド語と日本語だけで、英訳も仏訳も計画はなく、米国でも翻訳は断念されたそうです。スコヴロン先生は米国で仕事をされた経験もある学者ですが、おそらく先生ご自身が働きかけても、米国での翻訳はかなわなかったのでしょう。本翻訳プロジェクト、つまりショパンの全貌を言語資料でとらえ尽くす作業が、いかに困難かを想像させるエピソードです。

かつてポーランドの評論家イェジー・ヴァルドルフは、たとえショパンが1曲も作品を残さなかったとしても、書簡の名文だけで後世に名を残しただろうと評しました。筆者も、ショパンの音楽に劣らず文章が好きですが、とくに1840年代の晩年の手紙に心を惹かれます。そうした手紙は次の巻に収められますので、その刊行を心待ちにしています。

（三浦洋、北海道情報大学教授、本会運営委員）

《新会員のひと言》

私とポーランド

北浦 由花里

Dzień dobry! 札幌市出身で、ポーランド・ワルシャワにあるショパン音楽大学大学院に在籍しております、北浦由花里と申します。現在、ワルシャワにてピアノの勉強をしています。今年度から協会に入会させていただくこととなりました。

私とポーランドの出会いは、幼いころショパンの音楽に触れたところから始まります。その繊細で美しい音楽からは、彼の喜びや嘆きが感じられます。そんなショパンはどんな言語を話し、どんな生活をしていたのだろうか。そういった疑問を抱き、彼の祖国であるポーランドに留学することを決意しました。

ポーランドに住み始め、市民の方々の優しさに触れる毎日を過ごしています。悲しい歴史を経験してきたからでしょうか、常にお互いに助け合って生活し、私のような外国人にもたくさんの暖かい手を差し伸べてくれます。

右も左も分からなかった留学当初でしたが、今ではポーランドの文化を楽しむことができるようになりました。大学院では、ポーランドの文学や美術などにも目を向けながら、ショパンの他に、彼が生きた前後の時代の作曲家たちの研究もしています。ポーランドには素晴らしい音楽が数多くありますが、それらの根底には“民族としての誇り”を色濃く感じ取ることができます。

将来は、そんな魅力的なポーランド音楽の普及に貢献していきたいと思っています。今後皆様と交流させていただけることをたいへん楽しみにしております。どうぞよろしくお願いいたします。

（きたうら・ゆかり、ショパン音楽大学大学院生）

新刊紹介

『ポーランド語《詩篇》のための音楽』

ミコワイ・ゴムウカ(作)、黄木千寿子・小早川朗子・関口時正(編)

ハンナ
2021.1

ミコワイ・ゴムウカの生涯

ミコワイ・ゴムウカは、ポーランド・ルネサンスを代表する作曲家の一人です。1535年頃サンドミエシュに生まれ、45年末にのちのヤギェウォ王朝最後の王=大公ジグムント2世アウグストの宮廷少年歌手となり、その後木管楽器奏者として63年まで宮廷楽団に奉職しました。66年サンドミエシュに戻って金融や司法関係で活躍し、そこで結婚、一人息子ミハウを授かっています。

1580年頃、再び音楽家としてクラクフに戻り、87年まで司教ピョートル・メシュコフスキのお抱え音楽家となりました。その後1590~91年、宰相ヤン・ザモイスキの下に音楽家として滞在していたという記録を最後に消息は途絶えています。

現存する彼の作品は、ここでご紹介する詩篇歌集『ポーランド語《詩篇》のための音楽』(1580)のみですが、たとえ1作であれ、この作品は、ゴムウカをポーランド・ルネサンスの卓越した作曲家と呼ぶに足る、価値と独自性を持っています。

「黄金の時代」と詩篇歌

ヤギェウォ王朝時代はポーランドにとって繁栄を謳歌した「黄金の時代」であり、当時の首都クラクフでは、王室カペレや、ヴァヴェル城チャペルのロランティスト・カペレが、ツィプアーノ・デ・ローレやラッススなど当時西洋最先端の作曲家たちや、ポーランドの作曲家たちの作品を演奏していました。

一方市民階級の音楽活動も盛んになり、16世紀に広がった宗教改革によって自国語による平易な宗教歌が書かれ、それを普及するための印刷所が各地に作られました。中でも詩篇歌はカルヴァン派によって特に重視され、いくつもの詩篇歌集が出版される一方、カトリック側もその独占権を奪おうと詩篇歌出版に凌ぎを削っていました。

コハノフスキ「ダヴィデの詩篇」を音楽に

その中でとりわけ異彩を放っているのが、このゴムウカの詩篇歌です。現代ポーランド語の発展に多大な貢献をした、ポーランド・ルネサンスの代表的詩人ヤン・コハノフスキの、ポーランド語による「ダヴィデの詩篇」150篇に作曲されたこの作品は、テキストの特徴を音楽で表現し、言葉と音楽との一体化を計ろうとした工夫が随所に見られます。

また、おそらく宮廷楽団時代に培われたであろう、当時の西欧における新旧さまざま

な技法（伝統的なネーデルランドの対位法からマドリガーレまで）に加えて民族的なポーランド舞踊のリズムが駆使され、簡素で無駄のない150余の小品に束ねられています。

宗教的寛容の証しとして

まさに珠玉と言える、美しい作品の数々は「素朴な民衆のために」書かれ、カトリック司教に献呈されながらも、賛辞は改革派活動家が寄せるという、当時としては稀有な宗教的寛容の証しでもあります。

この度ハンナ社より、ポーランド声楽曲選集の第6巻として、このうちの37曲が出版されました。多くの方々が、この美しい作品を知り、味わってくださることを願ってやみません。（黄木千寿子、音楽学、愛知県立芸術大学ほか非常勤講師）

『迷子の魂』オルガ・トカルチュク(文)、ヨアンナ・コンセホ(絵)、小椋彩(訳)

岩波書店
2020.11

2019年、ポーランドで五人目のノーベル賞を受賞（2018年には『逃亡派』2007で国際ブッカー賞を受賞）したオルガ・トカルチュクが、その前年の2017年に初めて「絵本」にテクストを提供した、この『迷子の魂』は、ヨアンナ・コンセホの詩的“絵画”（絵本の領域をはるかに超えた、美術絵画のカテゴリーに組みするもの。銅版画（エッチング）と疑う陰画と、華やかな油彩の陽画との鮮やかな対比！）を得て、私のかつて知らない、他に類を探し得ない巧緻、精緻な絵本に仕上がっている。（海外の絵本では、独自繊細なモノクローム線画と強弱の韻を踏んだ文章―その全てが柴田元幸訳―のエドワード・ゴーリーへの傾注私は未だやまずにいるが、そのテイストを全く異にする。）

白水社の『逃亡派』読後で、トカルチュクがワルシャワ大学で心理学を専攻、卒業後セラピストを経ていることを既に知っていて、『迷子の魂』からエッセンスとして浮かびだしたのは「ユング」だった。ユング自伝の中の熾烈な言葉「人間にとって決定的な問いとは、自分が限りないものとつながっているかどうかということである」を鮮明に想起した。

あるところに忙しいビジネスマンがいた。（それはとりもなおさず直進する文明社会を黙々と生き継いでいる私達だ。一人のヤンは千人の私達だ。）ある夜、出張先のホテルで夜中に目覚めて異常に気付く。息が出来ない、自分の中にもはや誰もいない、名前すら憶い出せない。翌くる日、賢い女性医師を訪ね、次のように告げられる。「忙しく走り回る人で世界はあふれ返っている。彼等の魂は背後に置き去りにされて迷子になっている。」医師はヤンに告げる。「魂が動くスピードは、身体よりもずっと遅い。あなたは静かに落ち着ける場所を見つけて、そこでじっくり自分の魂を待ちなさい。」

ヤンは医師の治療法に従順に従ってその街の田園の小さなコテージにとどまり、迷子にした魂のやってくるのを、どこへも行かず何もしないで、幾日も幾週も幾年も待つ。幼い頃の光り輝いていた時代（陽の色のコートを着た少女がいつも彼に寄り添っている）の画がコテージの男の絵と等分に、絶えず私達に保たれる。思い出はセピア色の写真にまで添えられる。

待ち続ける物語は、誰しもが反射的にベケットの『ゴドーを待ちながら』1952 を思う。ゴドーは一体誰だったのか。神だと言い、救済者だと言い、そしてその不条理劇に私達は心酔した。あれは人間が存在しているのはどういうことか、と考えさせる実存主義哲学の出発点だった。

『迷子の魂』では、トカルチュクは悲惨な 寓話には終らせない。魂は、ある午後、美しい少女となってヤンの窓辺に、疲れて汚れて傷だらけで“やっと！”と言って帰ってくるのだ。表紙の椅子には、解離性障害を予兆させるヤンの上着（ジャケット）が絶望としてかかり（椅子の足元には忙しい移動の暗示として重要な意味をもつトランクが置かれ…）、陽転の日々の安堵の椅子（同一）には少女（魂）のオレンジのコートが 希望 としてかけられている。

コンセホの絵には到る処、美しい仕掛け（ギミック）が横溢している。詩と思想が濃く潜んでいる（『迷子の魂』は2018年に栄誉あるボローニャ・ラガッツィ賞を受賞）。ヤンが魂を失っている時のモノクロページは無機質な冬の絵で、やがて植物や動物に囲まれる（自然回帰…）色彩豊かな世界へ。そしてさらに濃密な光と彩りで生の歓喜へ。

最終章でヤンはトランクと時計を庭に埋める。ヤンとその初々しい魂は相携えて、これからアンダンテ・モデラートといった足どりでゆっくりと原郷への道を歩み出すのだろう。

去年春からこうしてコロナ禍にあって、世界で移動が制限され、此処に留まることを余儀なくされた今、私達はもう一度「魂」と出逢わなければならない。

人類必至の道程。私達はもう魂を迷子にはさせない。（長屋 のり子、詩人、本会会員）

ポーランド&ニッポン歳時記 36

俳句投稿十年を経て

「POLE」に俳句を投稿し始めてから十年が経ちました。最初は美しい世の中への新鮮な感動から生まれていたものが、次第に私の内面的な不安や混乱状態を反映したものとなってしまいました。何度も投稿するのを止めようかと考えたことがありました。俳句を詠むつもりで川柳になってしまったこともよくありました。それでも時には沈思黙考の中で出来上がるものがあります。

kręci się kręci　　風車
kolorowy wiatraczek　　廻り廻って
w czerwcowym deszczu　　雨彩う

Monika Tsuda, Poznań ポズナン市、津田モニカ

leśna polana　　森開け
pośród źdźbeł traw mignęły　　草間に閃く
słuchy zająca　　野兎の耳

Piotr Wrzeciono, Warszawa ワルシャワ市、ピョトル・ヴジェチョノ

畑、蛙、ボウフラと吾慈雨を待つ
ドッカンと特大花火打ち上げろ
秋風はつむじ曲がりの路地抜ける

岩見沢市、霜田千代麿

新刊紹介

『窓の向こう～ドクトル・コルチャックの生涯』

アンナ・チェルヴィンスカ-リデル（著）、田村和子（訳）

石風社
2021.5

戦争の記憶

戦争と聞いて何時のどの戦争を思うかで世代が分かるという。昭和23年生れの私はベビー・ブーマー戦後団塊の世代である。では昭和20年12月生れの姉は終戦世代？ 7月の池澤夏樹、3月の吉永小百合は戦中世代？ 昭和17年生れの夫も戦中世代。

『窓の向こう』の主人公はユダヤ人医師ヤヌシュ・コルチャックことヘンリク・ゴールドシュミット。1878年ロシア占領下のワルシャワに生れ、ユダヤ人孤児施設を経営。ナチスにより二百人の子供達とともに1942年8月5日トレブリンカ絶滅収容所に送られ64年の生涯を終えた。

アンジェイ・ワイダ監督が映画化し3年前の例会で「講演と映画の集い」、パネル展も行われた。

ところでお気づきだろうか。1942年は昭和17年。夫はその時生後5カ月の乳呑み児であった。79歳の夫の誕生に注目するとき、私の未生に起きた戦争の歴史がぐいっと接近して来るのを感じた。

女性達の存在が凄い

コルチャック先生に魅せられたのは勿論だが、女性達の存在が凄い。同居の母方祖母は「お前さん、まるで哲学者だよ」と幼い孫に愛情を注ぎ、此処一番では娘婿にもピシャリと強い態度で守る。

ステファ嬢とは互いに同志愛を感じ、一緒に孤児院を経営。妻帯しなかった先生だが、時に口煩い女房のような彼女とは、一生信頼し合った。留守の時の燥（はしゃ）ぎようといったら、子供以上の子供っ振りで、いやはやなんとも。

ポーランド女性ヴォシャの存在も見逃せない。蔑まれた職業の洗濯をこなし、その上ステファ嬢を献身的に支え戦時下の子供達を守った。

ユーモアを武器に

厳格だった父の精神病院での死、自身のチフスの看病で命を落とした母。この哀しみを先生は執筆で乗り越え数度の従軍、迫害の苦難の日々を子供達と生き抜いた。飛び切りのユーモアを武器に。

その先生の偉人伝とせず、日常のエピソードをイキイキと表現し、語り、子守唄、お伽話風に丁寧に紡ぐ著者の力量に目を見張る。ところどころそれと分かる楽しい仕掛けもあり、これには唸（うな）った。

自由、愛、平和の象徴

「窓」「窓台」「ゼラニウム」がふんだんに出てくるが、これは空間への眼差し、自由、愛、平和の象徴。この辺りはどうかご自分で確かめて頂きたい。

暗く重い歴史を輝きと翳りでくっきりと書き切った。訳者田村和子さんも凄腕だ。文句なく上手い。言い回しの妙「軟弱者、くたばったんだわ、ですから」にはニヤリとさせられる。

解説といえる「あとがき」は行き届いた文章で歴史に弱い身には助かった。9歳位から読めるような数々の配慮にもコルチャック先生への愛を感じた。秀れた一冊である。

いま子供のあなた、むかし子供だったあなた、そんなん忘れちまったあなた、あなたにこそ今この本を!

（菅原三栄子、詩人、本会会員）

2021 年秋のイベント

《第97回例会》講演と交流の集い「石川慶監督ポーランド映画の魅力を語る!」札幌エルプラザ4階中研修室 C、9月17日（金）18:30～

《第98回例会》ポーランド名画ビデオ鑑賞&交流会『COLD WAR あの歌、2つの心』札幌エルプラザ4階大研修室 AB、10月1日（金）18:30～

《第35回定例総会》&交流会**《第99回例会》**第10回「午後のポエジア」動画鑑賞会、札幌エルプラザ4階中研修室、10月31日（日）総会 13:30～ & 交流会 15:00～

会員動向（2021.5~8）

退会：石澤麻里、塚原恵美子、塚原邦夫（敬称略）

新年度（2021.9~2022.8）会費納入のお願い

年会費（一般 3,000 円、学生 1,500 円）
また、維持会費としてご寄付（1口千円）も承ります。
【ゆうちょ銀行振替口座】記号 02740 5 番号 19735
【加入者名】北海道ポーランド文化協会　または
［北洋銀行（本店営業部）普通預金口座］
［店番号］028［口座番号］0605084
［名義］ホッカイドウポーランドブンカキョウカイ
北海道ポーランド文化協会　会長　安藤厚

※ご請求額は個別の納入依頼（振替用紙同封）をご覧ください。
※遠方の方はご寄付 年千円で会誌 POLE の定期贈呈も承ります。事務局にお問合せください。

ご寄付ありがとうございます（2021.5~8）

（1口千円、敬称略）（4）中宮典子（2）引田秋生、今昇（1）小川真生、田村和子

POLE104　目　次

第35回定例総会&交流会《第99回例会》第10回「午後のポエジア」動画鑑賞会…… 1
《第97回例会》講演と交流の集い「石川慶監督ポーランド映画の魅力を語る!」／映画による十戒～キェシロフスキ監督『デカローグ』（久山宏一）／ポーランド映画の金字塔『デカローグ Dekalog』…… 2
ポーランド国立民族合唱舞踊団「シロンスク」の動画から～「EXODUS」、民族舞踊ワークショップ、弦楽四重奏（小川真生、中宮典子、田口綾子）…… 4
コンピュータを利用した私のアイヌ語研究（ミハウ・プタシンスキ）…… 6
今秋のアマレヤ劇団北海道公演の計画（丸山博）…… 7
《新刊紹介》「ショパン全書簡」第2巻、第3巻（三浦洋）…… 8
《新会員のひと言》私とポーランド（北浦由花里）…… 9
《新刊紹介》『ポーランド語《詩篇》のための音楽』ゴムウカ作（黄木千寿子）…… 9
『迷子の魂』トカルチュク文、コンセホ絵（長屋のり子）…… 10
ポーランド&ニッポン歳時記36（津田モニカ、ピョトル・ヴジェチョノ、霜田千代暦）…… 11
《新刊紹介》『窓の向こう～ドクトル・コルチャックの生涯』アンナ・チェルヴィンスカ-リデル著（菅原三栄子）…… 11

発行　北海道ポーランド文化協会
〒060−0018 札幌市中央区北 18 条西 15 丁目 3-19　安藤方
電話・FAX 011-556-8834、hokkaidopolandca@gmail.com
東京事務所　〒107−0052 東京都港区赤坂 9-6-29-309 音響計画㈱　霜田気付
電話 03-6804-1058 FAX 03-6804-6058

ポーレ編集委員会
新井藤子／氏間多伊子
熊谷敬子／塚本智宏
松山敏

POLE no.104 (September 2021)

Newsletter of the Hokkaido-Poland Cultural Association

Table of Contents

35th Annual Meeting & video screening of the 10th reading session "Afternoon Poesia" on 31/10/2021 1
Lecture and dialogue "Director Kei Ishikawa talks about the charm of Polish films!" on 17/09/2021 / Films based on the Ten Commandments - "Dekalog" directed by Krzysztof Kieślowski (K. Kuyama) / The glorious monument of Polish cinema "Dekalog" 2
From the video produced by the Song and dance ensemble „Śląsk” - "EXODUS", folk dance workshops, string quartet concert (M. Ogawa, N. Nakamiya & A. Taguchi) 4
My Ainu language research using a computer (M. Ptaszynski) 6
Amaraya Theater & Guests Hokkaido tour plan for this autumn (H. Maruyama) 7
(New Books) “Korespondencja Fryderyka Chopina” vols. 2 & 3, trans. by T. Sekiguchi (H. Miura) 8
A new member’s message: Poland and me (Y. Kitaura) 9
(New Books) “Melodie na Psałterz Polski” by Mikołaj Gomółka (Ch. Ouki) 9
“Zgubiona dusza” by Olga Tokarczuk (text), Joanna Concejo (illustlation) (N. Nagaya) 10
Haiku Yearbook: Poland & Japan 36 (M. Tsuda, P. Wrzeciono and Ch. Simoda) 11
(New Books) “Po drugiej stronie okna - Opowieść o Januszu Korczaku” by Anna Czerwińska-Rydel (M. Sugawara) 11